

2021年8月18日

『飯舘村からの挑戦』を読んで（感想文）

東日本大震災から10年が過ぎた。昨年12月に、『飯舘村からの挑戦－自然との共生を求めて』（田尾陽一著 ちくま新書）が出版された。

2011年4月22日、福島第一原発から約50キロ離れた飯舘村は、原発事故で住民の全村避難を強いられた。6月、著者は友人らとともに飯舘村を訪れ菅野宗夫さんと出会い、「被災地域の現場において、被災者と協働し、継続的な活動を行う」ことを活動の指針とする「ふくしま再生の会」の創設と参加を広く呼びかけた。本書は、多くの仲間（ボランティア、研究者・技術者、退職者、市民）と村民とともに10年にわたり活動を続けてきた記録である。

ふくしま再生の会では、現地で復興に向けた調査・交流・実験・行動、スタディツアーを行うとともに積極的な情報発信をしてきた。年に1～2回、東京等で活動報告会や村民との交流会を開催してきた。本書には、交流会での村民の声や、スタディツアーに参加した学生・生徒や外国人の感想や意見が多く収められている。これらの人々の言葉は、大地に自然と共に生きる人間の力強さ、未来や世界につながる感覚を示唆していて、本書が単に10年間の活動報告にとどまらず今後の10年、また一地域にとどまらず広く日本の各地域に共通する指針となっていると思う。

私は、声をかけてもらって、2011年12月に東京・新宿の大学の教室で開かれた「第2回ふくしま再生の会報告会」にでた。飯舘村から菅野さんご夫婦が出席され、千恵子さんが泣きながら訴えられた。「なぜ、ふるさとを追われなければならないのか、避難させられた年寄りの目は虚ろ、年寄りの尊厳をどうしてくれるのか」。高齢者のケアにかかわることを仕事とさせていただいている者として、済ますことができず、とにかく「行ってみよう」と仲間を誘って通っている。

仮設住宅になじめず避難勧告の出ている自宅に戻られたお年寄りとの交流、避難を選ばなかった村内の特養ホームの訪問、仮設住宅の集会室を借りて「足もみ楽々クラブ」（足湯・フットケア）、「健康の集い」（体操・フットケア・健康講話等）、解除後の村内での「健康いちばんの集い」「久しぶり集まってみんなで楽しく」などを通じて、藤沢や首都圏から参加する医師や看護師、管理栄養士・介護士・セラピストとともに、村民との交流を続けてきた。昨年からはコロナ禍で村内への訪問ができなくなっている。そんな中で、若い人たちを中心とした移住者が100人を超え積極的に活動をしていると、明るい知らせに夢を馳せている。

ソーシャルワーカー 北村充成